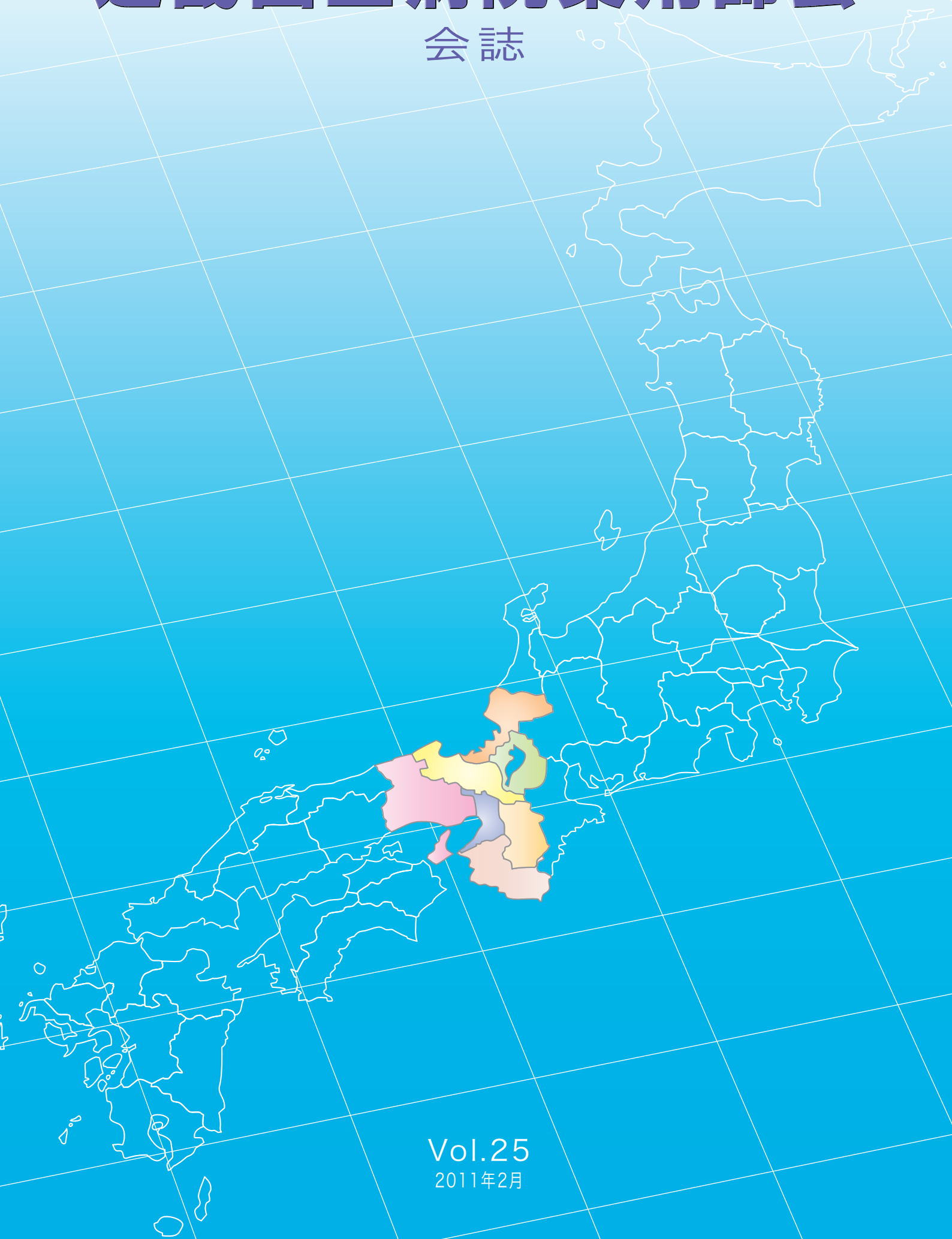


# 近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.25  
2011年2月

## 目 次

会長挨拶	2
大阪医療センター	小森 勝也
提言『禁煙』	3
神戸医療センター	和田 洋忠
薬剤科紹介 兵庫青野原病院	5
兵庫青野原病院	田中 三晶
広報委員会委員長交代のご挨拶	7
刀根山病院	廣畑 和弘
平成23年度近畿国立病院薬剤師会 総会	9
平成23年度近畿国立病院薬剤師会 特別講演会報告	11
近畿中央胸部疾患センター	小川 陽子
専門薬剤師「感染制御専門薬剤師について」	12
大阪医療センター	島本 裕子
編集後記	13

## 会長挨拶

近畿国立病院薬剤師会  
会長 小森 勝也 (大阪医療センター)

「ウイスキーがお好きでしょ」。夜景を見下ろすお洒落なバーで、美人バーテンダーが常連客たちにハイボールを振舞う。ゴスペラーズが唄う CM ソングに惹きつけられてもう二年。今やハイボールは CM 効果も相まり、バカ売れである。サントリーによると 2009 年に約 350 万人だった実飲経験者は、2010 年に 1200 万人まで増加。ハイボールとはウイスキーのソーダ割り。40 年ぐらい前になるが、学生時代によく飲んだものである。当時はお金がないので「角瓶」には手が届かず、「トリス」で乾杯。50 歳代にとってはとても懐かしいはずだ。年配の飲み物であったウイスキーが波紋のように 20 代、30 代の若者へと。ソーダで割る飲み方を若者たちが「自分たちにも合う飲み物」として認識したのであろう。結果として、その斬新なスタイルが世代の枠を超えて楽しまれている。

薬剤師会というツールを通して自分は多くの人とふれ合っている。飽和点はなく、邂逅の連続だ。多彩な出会いはドラマであり、生きていることの歓びでもある。会員数 240 名も抱えるのだから、世代の幅は広い。そんな中、去年は活動の根幹をなす委員会の形態を大きく変えた。会員の総意として臨床業務委員会を廃止し、自分たちに合う「部会スタイル」へと飛翔したのである。誕生した 13 もの部会は、楽しみながら個人の能力をのばす発想で臨んでおり、頼もしく思っている。自分たちに合った風土の芽を大切に育てていけば、薬剤師会自身は個人と組織の壁がなくなり、創造的に育っていくのであろう。まるでハイボールのように。

人生で一番難しいことは何か？「それは自分を知ることである」

人生で一番やさしいことは何か？「それは他人に忠告することである」

人生で一番楽しいことは何か？「それは目的を持って、それを達成することである」

これは大好きな哲学問答である。知っているつもりでも、一番知らないのは自分のこと。その証拠に自分の背中では自分では見えないのだから…。一度きりの人生なら、楽しみつつ目標に向かって突っ走り、達成感を味わって見たいものである。目的を持てば自ずと問題意識が起き、情報感度も鋭くなる。達成しようとする心の姿勢があれば行動も変わっていくのである。最後にもうひとつ、好きな言葉を紹介したい。百聞は一見にしかず、百見は「一試」にしかず。

## 提言

### 『禁煙』

神戸医療センター 和田洋忠

「提言」を辞書で調べてみました。「自分の考えや意見を出すこと。また、その考えや意見。」とありました。提言のコーナーを依頼され、さて、何を提言すればよいのか。提言というと何かしら立派なことを書かないといけないような追い詰められた気になりましたが、つぶやき気分で書くことにしました。

約3年前、兵庫県病院薬剤師会主催の講演会で座長を務めさせて頂いたことがありました。講演のタイトルは『禁煙へのアプローチ』で、講師は神戸大学大学院医学研究科の西村善博准教授でした。講演の流れとしては喫煙がもたらす喫煙者への害から受動喫煙者への害、社会への影響、そして地球環境への影響へと繋がっていきました。その後、節煙に対する誤った知識や具体的な禁煙方法について分かり易く講演して頂きました。海外でTV放送されている禁煙の広報ビデオなども紹介されましたが、それはまるで麻薬や覚醒剤などの薬物の扱いでした。また地球環境への影響も思いもよらぬ現実があることを初めて知りました。それは葉タバコの乾燥に大量の木材が必要であり、そのため、世界で毎年2,000km<sup>2</sup>の森林が伐採消失しているということでした。大阪府の面積が1,893 km<sup>2</sup>なのでその破壊力には驚かされました。タバコの葉っぱを1キロ乾かすのに、薪で言えば10キロ必要であり、世界で伐採される木の6本に1本はタバコを乾かすために使われているということでした。タバコを製造するという事は環境破壊と地球温暖化ガスの排出をどんどん行っているということです。現在、エコが叫ばれている中、禁煙も大きくエコに繋がることがわかりました。そして禁煙治療で何より大事なことは、周囲の方々の「誉める」「励ます」「感謝する」ことだということはこの講演会で学びました。

あれから2年半経って、ようやく私も禁煙に踏み切りました。きっかけは2010年10月からのタバコの値上げです。禁煙は今回が初めてではなく、何度もチャレンジしたことがありました。禁煙補助剤はご存知のように内服剤、パッチ、ガムの3種類あり、私も過去においてそれぞれ試しましたが、うまくはいきませんでした。長くて10か月、短くて1日で挫折しています。今回はパッチを親友と思い、悪友の晩酌とは絶交しました。幸い、薬剤科のメンバーには喫煙者がいませんので絶交せずに済みました。それどころか、離脱症状が出てきたときは薬剤科の禁煙経験者が共感してくれ、励ましてくれました。これまでの最大のピンチは1週間目の離脱症状でその後も何度か離脱症状はありました。離脱症状には「タバコがすいたい」「頭痛」「いらいら」「体がだるい」「落ち着かない」「眠い」

等がありますが対処方法もあります。私の場合「タバコがすいたい」と思ったらまず、お金がもったいないと考えました。それと同時に、禁煙のチャンスはこれが最後かもしれないと考えることでした。次に「水を飲む、深呼吸、低カロリーのガムや干昆布をかむ、軽い運動をする」などです。また「ニコチンパッチ」を使っていて強い喫煙欲求があった場合には「ニコチンガム」を噛むという合わせ技もあるようですがそれはせずに済みました。禁煙治療において薬は有用ですが、禁煙に取り組むための知識がその成功に繋がるようです。しかし長期間禁煙していてもショックなことがあった場合などには再喫煙しやすいようなので今後も、心しておかなければなりません。長年の喫煙者にとって禁煙が成功したというエンドポイントは生涯ありません。死ぬまで禁煙して成功したということです。長く苦しい道のようなのですが、今のところ禁煙して感じたことは生活がしやすいということです。どういう事が説明はしませんがこれは大きなことです。

皆さんご存知かもしれませんが、2010年4月に日本循環器学会、日本肺癌学会、日本癌学会、日本呼吸器学会から『禁煙治療のための標準手順書 第4版』が発行されました。禁煙治療に関する詳細が書かれています。これを参考にしました。

([http://www.j-circ.or.jp/kinen/anti\\_smoke\\_std/anti\\_smoke\\_std\\_rev4.pdf](http://www.j-circ.or.jp/kinen/anti_smoke_std/anti_smoke_std_rev4.pdf))

最後になりましたが、喫煙者の皆様、私を誘惑しないでください。お願いいたします。

# 薬剤科紹介



## 兵庫青野原病院 基本理念

- 〔正しい医療〕 科学的根拠に基づいた正しい医療を心がける。
- 〔高度な医療〕 高度で先進的な医療を日々研鑽し提供する。
- 〔やさしい医療〕 生命と人権の尊厳をまもり、患者にとって最もやさしい医療を提供する。

## 兵庫青野原病院 運営方針

- 〔1〕 患者さんやその家族に十分な説明を行い、納得し安心していただき結果として満足していただける医療を提供する。
- 〔2〕 地域の医療施設と連携を図り、地域住民に良質な医療を提供する。
- 〔3〕 重症心身障害児(者)の専門医療施設として政策医療ネットワークに参画し、高度で、やさしい医療を提供する。
- 〔4〕 専門的な教育研修、医療情報の発信に努める。



## 環境

兵庫青野原病院は兵庫県播磨地域南部の小野市と加西市にまたがる青野原台地の森のなか、小野市、加西市、加東市の市街地のほぼ中間に位置し、近くに県立フラワーセンター、県立播磨中央公園があり自然環境に恵まれています。

また、中国道滝野社インター、山陽道小野三木インターから約20分、大阪市まで1時間と交通にも便利なところ。そのため近くに滝野工業団地、社工業団地が整備されつつあり、現在は景気の低迷で伸び悩んでいますが、近い将来発展し人口増も見込まれています。

またこの地域はもともと病床不足の地域であり、多くの患者が圏外（神戸市、姫路市など）の医療機関へ流れている現状にあり、地域医療を担うしっかりした医療機関が必要とされていることから、当院は地域医療を担う医療機関としてますます充実していかなければならないという環境の中にあると言えます。

### 診療機能の特色

重症心身障害児(者)医療の他、人口の高齢化、疾病構造の多様化に対応して、呼吸器疾患、循環器疾患並びに肺がん等の悪性腫瘍、骨・運動器疾患等で地域の医療需要にえています。重心は、短期入所はもとより在宅支援として17年2月からB型通園事業を実施、18年12月から通園者の入浴サービス及び障害児(者)地域在宅巡回訪問支援事業、さらに20年8月から日中一時支援事業を開始し包括的重心医療を推進しています。

また、障害者・高齢者に対する摂食・嚥下機能訓練についての北播磨二次医療圏での教育、指導、情報発信機関の役割を担っています。

薬剤科員はこれら基本理念・運営方針に基づき、方向性をしっかり確認しながら業務に携わっています。3人という少ない人数ではありますが、全院外処方箋のチェック、抗がん剤の無菌調製、薬剤管理指導、医師・看護師等とのチーム医療、そして調剤過誤に細心の注意を払いながらの膨大な調剤（重心160床）をこなしています。7月に神戸医療センター、姫路医療センターと当院で「薬学6年生病院実務実習に於ける他施設合同見学」を開催し、非常に有意義であったとともに、実習生にも好評でした。

平成25年10月には小野市民病院と三木市民病院が統合された「北播磨総合医療センター」のオープンが決まっており、その時代に求められる医療の提供に努力したいと考えています。



バレンタインデー、雪が降りました



(文責 田中 三晶)

## 広報委員会委員長交代のご挨拶

～ 1 / 2 Century の重み～

刀根山病院 廣畑和弘

このたび、近畿国立病院薬剤師会会長 小森勝也先生の委嘱により、山崎邦夫先生から広報委員会委員長を引き継ぐこととなりました。もとより微力ではございますが、8名の広報委員と力を合わせ、また会員の皆様方のご協力を得ながら、責務を全うしてゆく覚悟です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

さて、刀根山病院では、旧本館跡地に、6階建て300床の新病棟新築工事が、今夏の開院を目標に急ピッチで進んでいます。薬剤科も電子カルテとオーダーリングが稼働する新病棟に移転しますが、それに向けて薬剤科倉庫の整理中、古いダンボール箱を見つけました。開けてみて驚きました。その中には、「近畿国立病院薬剤師会」の設立当初の名称である「近畿国病国療薬学集談会」が発刊した「近畿国病国療薬学集談会誌」の実物が、ほぼ欠落せずに保管されていたのです。

第1号は残念ですが見あたりませんが、第2号はありました。昭和36年10月5日が発行日です。ガリ版刷りのわら半紙製で、6ページがホッチキス止めされています。保存状態は良好で、きれいで読みやすい手書きの文字が並んでいます。

トップ記事は、同年9月に来襲した第二室戸台風被害へのお見舞い、続いて阪大薬学部青木大教授を招いた講演会のお知らせ、次は「第16回厚生省総合医学会に参加して」というエッセイで、筆者は私にとって最初の薬剤科長で既にお亡くなりになられた堀剛太郎先生で、そのお人柄がしのばれる文章です。その他には、国立病院共同研究班打合せ、国立療養所共同研究班報告と続きます。「通報欄」には、年会費300円の入金催促、会誌原稿の募集、抄録集を本省へ郵送し好評であったという報告、第9回近畿薬学集談会研究発表会演題申込と発表形式、などが掲載されています。

第3号が昭和36年12月発行ですので、多分、第1号は昭和36年8月に発行されたのでしょう。ということは、近畿国立病院薬剤師会誌は、今年で発刊50年を迎える訳です。1/2世紀前の会誌に掲載されている内容を見れば、仕事に対する心意気や方向性には今も昔も大きな違いはないと感じます。印刷物の「力」も再認識しました。過去の会誌を読み直せば、時代の息吹が新鮮に感じられ、アナログな実物だけが持つ存在感には迫力があります。偶然に目にしたものとはいえ、改めて先輩の諸先生方が創刊された「会誌」をしっかりと受け継いでゆく事を肝に銘じた次第です。

1/2世紀の時が経過して、「広報」の概念は全く変わりました。「情報はインターネットで探すもの」という認識は今や常識で、インターネットから薬剤師が発信する医療情報



を容易に入手できます。現代では、「広義の広報とは、**Public Relations** であって、双方向コミュニケーションである」とされます。言い換えれば、広報とは「わかりやすく伝え」かつ「相手の印象を聴き」、相手の印象を反映したうえで「さらに伝える」ことを繰り返す作業です。広報を利用する情報公開は、自らの再確認と再構築、組織の活性化、スタッフの士気向上、経営力強化に役立ちますし、情報の受け手側の方々にとっては、満足度の向上、選択の自由の拡大に役立つはずです。質の高い情報を選別できる能力を持つ情報検索者を満足させるだけの情報発信能力がなければ、結果に結びつかない時代です。結果の意味合いも、病院収益、新人募集、実務実習生誘致、など様々です。結果も問われる時代となりました。

広報委員会では、インターネットで見つけられない情報、見つけにくい情報は、実質として存在しない事と同様と考えています。また、人間同士の双方向コミュニケーションこそが広報の真髄とわきまえ、皆様に信頼されるインターネットホームページを利用した広報活動を行ってゆきたいと考えています。そのためにも、広報委員は全員が役割分担を明確化し、お互いの目的をはっきり認識することで、より質の高い広報活動を目指してまいります。今後とも、皆様のご協力とご支援を、宜しくお願い申し上げます。

## 平成23年度近畿国立病院薬剤師会総会報告

近畿中央胸部疾患センター 小川陽子

平成23年度近畿国立病院薬剤師会総会が平成23年1月8日（土）KKRホテル大阪にて開催された。

総会に先立ち、平成22年度の合同報告会（教育・業務検討委員会）が行われた。

15時、岡田副会長の開会の辞により総会が開始となり、小森会長から挨拶があった。引き続き、山崎薬事専門職より挨拶を頂き、中多前薬事専門職より平成22年11月1日付けで専門職を拝命した旨伝えられた。専門職異動に伴い広報担当理事は刀根山病院の廣畑副薬剤科長に引き継がれた。

議長には京都医療センター齋藤副薬剤科長が選出され、22年度事業報告、会計報告、会計監査報告があり、全て承認された。

続いて23年度事業計画案、予算案について審議され全て承認された。その後、部会紹介と活動報告が行われ、最後に岡田副会長の閉会の辞により、無事総会が終了した。

日時：平成23年1月8日（土）

場所：KKRホテル大阪

担当施設：大阪医療センター

出席者数：出席者121名、委任者102名

会則第12条に従い、会員過半数出席により総会が成立

司会：岡田副会長（宇多野病院 薬剤科長）

開会の辞：岡田副会長（宇多野病院 薬剤科長）

議長：齋藤副薬剤科長（京都医療センター 副薬剤科長）

閉会の辞：岡田副会長（宇多野病院 薬剤科長）



### 報告および審議事項

#### I. 報告事項

##### (1) 平成22年度事業報告

①総務 平成22年度年間活動報告について山内総務担当理事（大阪医療センター）より報告があった。

②広報 広報担当会議、担当の任務分担、名簿と緊急連絡網の作成、改訂、ホームページ、会誌について廣畑広報担当理事（刀根山病院）より報告があった。

### ③地区会報告

- |              |                          |
|--------------|--------------------------|
| ・京都北部・福井地区   | 覚野地区理事（舞鶴医療センター）         |
| ・京都南部・滋賀地区   | 田中地区理事（京都医療センター）         |
| ・兵庫南部地区      | 水谷地区理事（姫路医療センター）         |
| ・大阪北部・兵庫東部地区 | 杉山地区理事（循環器病研究センター）       |
| ・大阪南部地区      | 老田地区理事（近畿中央胸部疾患センター）     |
| ・奈良地区        | 松本地区理事（奈良医療センター）         |
| ・和歌山地区       | 宮地地区理事（代理河島）（南和歌山医療センター） |

### ④近畿国立病院薬剤部科長協議会

平成22年度事業について小森会長（大阪医療センター）より中間報告があった。

- (2) 平成22年度会計報告について本田経理担当理事（大阪医療センター）より報告があった。
- (3) 平成22年12月24日に平成22年度会計監査が実施され、砂金監査役（和歌山病院）より適正かつ正確であるとの報告があった。

以上について審議の結果、賛成多数で承認された。

## II. 審議事項

### (1) 平成23年度事業計画

#### ①総務

平成23年度事業年間計画について山内総務担当理事より説明があった。

#### ②広報

名簿・緊急連絡網、会誌、ホームページ、担当分担について廣畑広報担当理事より説明があった。

#### ③各委員会

平成23年度の事業年間計画について、教育研修委員会は和田委員長（神戸医療センター）より、業務検討委員会は小林委員長（姫路医療センター）よりそれぞれ説明があった。

- (2) 平成23年度予算案について本田経理担当理事より説明があった。

以上について審議の結果、賛成多数で承認された。

## その他

国立循環器病センターの独立行政法人化に伴う組織名称、独立行政法人国立循環器病研究センターへの名称変更について報告された。

部会代表者より活動目的、運営方針の紹介があった。

## 平成23年度近畿国立病院薬剤師会 特別講演会報告

近畿中央胸部疾患センター 小川 陽子

日時：平成23年1月8日（土）

16時20～17時50分

場所：KKR ホテル大阪

参加人数：近畿国立病院薬剤師会会員 102名

講師：前厚生労働省大臣官房審議官 岸田修一先生

演題：「薬剤師の将来と国民の望み」



H22年度より薬学6年制での実務実習が開始となった。質の高い医療をより早くより安価に提供することで、国民のQOLを高めるために薬剤師が今後何を期待されるかを中心に講演された。

医薬品開発や良質な医療の貢献に関して4つにポイントを絞り、行政・臨床・研究の各分野の視点から展開された。

治験・臨床研究の推進に関して、ドラッグ・ラグは埋まっていないばかりかギャップも生じている。今後、治験の質とスピードを上げる必要があり、そのためには世界の患者を対象とした開発をすすめていくべきで英語対応が求められる可能性が出てくる。

また、同時開発により市販後早い段階で重篤な副作用が出現するようになる。このことから、病院や薬局での薬剤師の役割は大きいと考えられる。

ライフサイクルマネジメントとは、医薬品の「価値の最大化」と「寿命の延長」である。医療現場からの声が医薬品の付加価値向上への寄与はおおきい。

チーム医療の推進に関して、病院薬剤師は薬の専門家として主体的に薬物療法に参加し、各医療スタッフからの相談に応じる体制が望まれる。医療現場において更なる期待について話された。

今回の講演を通じて、薬学6年制を迎えての薬剤師の今後の業務のあり方や方向性について考える場をいただいた。

## 「感染制御専門薬剤師について」

大阪医療センター 島本裕子

日本病院薬剤師会専門薬剤師・認定薬剤師認定制度とは、薬剤師の専門性を生かしたより良質の医療を提供するという社会的要請に応えるため、高度な薬物療法について知識・技術を備えた薬剤師を養成することを目的とする。感染制御専門薬剤師の認定は平成 17 年より開始されており、平成 22 年 4 月に公表された感染制御専門薬剤師は 207 名となっている。

感染制御分野において薬剤師が担う重要な役割のひとつとして、抗菌薬の適正使用推進が挙げられる。現在私は院内感染対策チーム(ICT)に所属しており、主に抗菌薬の TDM、コンサルテーション業務を行なっている。そこで今回、これらの業務を中心に、感染制御分野において期待されると考える薬剤師の専門性について述べる。

感染症治療において抗菌薬は非常に重要であるが、その存在は意外と奥深く、適正な使用には幅広い知識と的確な判断が必要とされる。感染制御の分野において「抗菌薬の適正使用」が長年にわたり達成できていないことは大きな課題であり、また、このことから“適正使用”の難しさがうかがえる。感染症治療には大まかには以下のステップが挙げられる。①感染巣の特定、②起炎菌の同定、③抗菌薬の選択、④投与量・投与方法の検討である。うち、薬剤師は特に③、④のステップに大きく関わることが可能である。日本の感染症教育は他の先進国と比較し遅れているといわれており、臨床では漫然と抗菌薬が使用されているケースが散見される。抗菌薬の PK/PD を正しく理解した薬剤師が介入することで、抗菌薬による治療を効果的かつ安全に行うことが可能であると考えられる。また、介入を円滑に行う上で ICT 内の医師、看護師、臨床検査技師など他職種との連携も非常に重要である。

一方、TDM は個別化医療を行う上で、非常に有用なツールである。当院においては、バンコマイシン(VCM)の TDM を平成 18 年 9 月より開始しており、その解析実施累積件数は 1400 件を超える。血中濃度解析は医師からの依頼制で実施する病院が多い中、当院では検査科が測定した全ての VCM の検体について薬剤師が血中濃度解析を実施している。このように積極的に TDM を実施することにより、依頼していないにも関わらず薬剤師が介入することに当初は戸惑いの見られた医師側からも、現在では投与方法に関するコンサルテーションが数多く寄せられるようになっている。医師向けの感染症治療の成書にも、「抗菌薬の TDM には、TDM 専門の薬剤師の存在が望ましい。」と記載されており、この領域における薬剤師の活躍が期待されている。感染制御の分野において、TDM を活用することで今後さらに薬剤師がその専門性を確立することが可能であると私は考えている。

## 編集後記

♪ このたび初めて会誌を担当することとなり、戸惑いと楽しみの心境です。皆さまのご協力を賜りながら広報委員一同で充実した会誌作成を目指してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

♪ 本年は、1953年に本放送が開始された日本の地上アナログテレビは58年の放送を終了し、地上デジタル放送に完全移行されます。九州新幹線が鹿児島まで開通、昨年には東北新幹線が新青森まで開通したことから、1964年に開通した新幹線は47年を経て本州から九州まで横断連絡されることになりました。薬学部新カリキュラム1期生も遂に6年次の最終学年になります。今年も、大きな変化のある年になりそうです。

♪ 今年最初の会誌をお届けします。本年もどうぞよろしくお願いいたします。会員の先生方も今年一年、健康第一でお過ごしください。会長挨拶、科長提言、薬剤科紹介、総会記事、専門薬剤師など充実した内容となっています。どうぞ最後まで御熟読ください。

(T. M)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>

近畿国立病院薬剤師会会誌 第二十五号 平成23年2月発行  
発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局 大阪府中央区法円坂2-1-14  
(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

発行人 会長 小森 勝也 (大阪医療)

編集 広報担当理事 廣畑 和弘 (刀根山)  
広報委員 石塚 正行 (大阪南) 玉田 太志 (刀根山)  
本田 富得 (神戸医療) 朴井 三矢 (京都医療)  
中西 彩子 (大阪南医療) 東 さやか (大阪医療)  
奥田 直之 (大阪医療) 宮部 貴識 (近畿中央)